

ふりかえった四才児の一年間

堀合 文子

年間振り返ってみよう。

三月の終業式をおえて、一年ふり返ってみた時、ある満足感と、ある後悔が入り乱れる。

四才児は、幼児自体も心身共にぐっと成長する時期であり、将来への基盤がこの年令の時、つくられなければならない、団体生活からみてまた、個人生活からみても、正しいそのルートにのせてあげなければならない時期である。幼稚園生活三年の中では、一番むずかしく、やりにくく、またおもしろく、そして大切である。三才児十五名の生活へ二十名の新顔を加え、自分の気持の緊張感と胸を走ったあのファイトが今でも思い出される。

一年間の幼児の特別な状態を、或る時は幼児の発達状態の段階ともなるが、その中より数種とりあげ、その時の自分の頭の中に考えた事、実行した行動、処置を時期をおって一

泣く子、親と離れない子、遊べない子が予想どおり数人いた。

●四月には例年経験することだから、覚悟と言おうか予想と言おうか、一応予期したことだが、長年経験していても胸がどきどきしてしまう。

●朝むかえる時のタイムニングを特に考えた。部屋へきた時、たよるべき人が姿をみせないことは、母親にかわる私共の立場を考え、三十五人いれば三十五人の幼稚園での母親であるつもりで対処しないといけない。むかえる教師の態度は三才児の時と同じだった。(否これからもだ。)

●生活の中では、泣く子、不安げな子、遊べ

ない子は終始、注意をはらい、話しかけたリ、手をつないだり、自分の側にいつもおいたり、用事の時は必ずその事をはっきりしらせておくなど注意し、不安にならないよう、泣かせないように特にとくに配慮し、努力した。

●遊ぶ事に対しては、この四月だけの問題でなく常にこれは幼稚園生活には大切な事で教師が共にあそび一日も早く友だち関係ができるようにまた日が進めばその遊びの中で経験すると共に、生活習慣づけやその他の社会性の面も考え、あそびを指導するようにし、遊んでいる時は個々の幼児の顔色、気持を常にくみとっているようこの時期には特に留意した。

一年経験して来た人が、却ってべそをかいたり泣いたりした。

●おやおやと驚くと共に自分を反省した。どちらかと言えば三才児の一年間を経験した人は、あそぶことを始めとして種々の点私としても安心感があったので新入園児に心がうばわれていた。幼児は敏感だ。何か不安を感

じたのだ。

●勿論、前と環境がいろいろとちがうのは当然だし私もそれは考えていたが、改めて環境を考えなおしてみた時、部屋全体に机と椅子がとろせましと一ぱい。今までは十五名の幼児のための部屋が広々としていた。そこに一つの圧迫感のようなものを感じたらしい。こんな事は些細な事だが、いろいろ変化した環境の一つでも取りのぞけば気持の上で少しはプラスになるかと、早速、机、椅子の配置をかえてみた。と同時に新入園児と同じ態度をとるよう留意した。

例によつて例の如く、大分みんなも馴れてきて、離れない人もなくなり、或る程度何とかがそび始めたと思つた頃、思わぬ人、今まで元氣だった人が戸口でしょぼんとしたり、途中で泣きだしたり始めた。

●入園式後数日のあの忙しさから思うと日々みんなが落ちついてきて、一日一日前進の状態になってきた。今まで泣いたり、くっついていたりしていた人が何かの機会に友だちと遊んだり、にこにこしたりすると私もうれしく

なると共にほつとした気持になったところへのできごとで私の気持にもほつとさせられたり、やっぱりまだまだ気を許してはとゆう自分の反省もした。

●案外手ごわくて、何を話しかけても首を振る。却つて涙が多くなる。「家へお電話して」と約束して何とか帰りの時間までもたせた。次の日からはこんな人達も出さないよう。淋しさを味わせないようまた緊張が続く。

おべんとうが始まった。「まあおぎょうぎがわるい」とびつくりしたり、おかしくなつたり。

●初めてのおべんとう。いろいろの習慣づけも大切と約束しながらいよいよおべんとうをはじめ。はじめはみなお行儀よくじょうずに食べ始める。私も一緒におべんとうをすませ、ちよつとかたづけがてら用事をしてと部屋を留守にした。帰つてきてみるとまあびつくり。ある男の子が、食事がすんで遊んでいる砂場の友だちをみながら、何と食後のバナナを立て食べている。驚くと共に純な姿に苦笑し、こんな人たちが次第に習慣づけられ

るたのしみを持ちながら注意した。

計画があるので今日は製作でもしようと考え。やはりはじめたはよいが、「先生○○ちゃんと呼んでる」「先生○○ちゃんがころんだ」「先生これどうするの」「先生手をまくつて」「先生ちよつときてこんなものがある」「先生おにごっこしよう」「次々と用事どれもこれも満足してあげようと、とうとう仕事はできなかつた。

●幼稚園で経験する経験は、幼児の生活である。「あそび」の中の生活の中にいろいろ入れられてゆくが、先ず、幼児のあそびを充分にさせ友だち同志のあそびが正しくできるようにならないとその上に立ついろいろの経験はみんな崩れてしまう。また発達段階からみてもこの事は考えられる。教師も共にあそび友だちとのあそびを一日も早く正しいルートにのせる事が一応四才の一学期に考えなければならぬことである事は十二分に知っているが、恥ずかしいことに周囲をながめて何か仕事をさせているのを見ると、やはりやらねばと自分の信念もぐらつきせつかく遊んでいる

幼児を引っぱって仕事をさせてみてしまふ。

五月の鯉のぼりをつくらなければとはじめたが、やはりはじめると、「先生」「先生」「先生」「先生」と用事がおこる。その中には呼ばれなくても、砂場に水が一杯すぎてまた指導にゆかなければならぬし、仕事の指導どころでない。全部一斉に入れて指導すれば見たところは指導しては決して幼児の創造性はのびない。しかたないからやるといふ人間ができてしまふ。こんな事はいつも心の中、頭の中にある事だが、「でも」という気持で実際にやり出すと、生活の発達段階といおうかその面からも幼児の方から「今はだめですよ」と教えてくれるような状況だ。ああやっぱりこの時期にはやるべきでない。充分に友だち同志のあそびをやらせるべきだ。そして仕事などさせるよりもっと先にしなければならぬ大切なことをこのあそびの中に指導してゆかねばならないと今更のように自分の考えや信念に自身をもたせてくれた。そして「先生」「先生」と忙しくらいの用事がうれしく、また張り切って三十五人の三十五種の指導をきりきりまいでしようと飛びまわった。

●或る日「先生〇ちゃんけんかしているよ」。たいへんとかけつけてみるとはなばなしいけんかをしていた。

●友だちの呼ぶ声にあわてていつてみると、男の子が二人つかみ合いのけんかをしている。理由をきけばおもちゃをかしてくれないので暴力に出たので、お互につかみ合いになった。

●私は心の中で思った。「けんかをする位たのもしくなった。けんかをする位友だち同志の関係ができてきたのだ。けんかをする位幼稚園に安定感を持ち自分というものを出してきてくれたのだ。自分というものを、よいも悪いも赤裸々に出してきてこそこころはありがたくその上でよいものはよい、悪いものは悪いと指導しなければならぬ。」と。

●二人の間を平和に解決して次の機会をまた。今の事を忘れたように二人はたのしそうに遊んでいる。私はまた二人のところへやって来て、「まあ、仲よくあそんでいるのね。えらくなったのね」と一言。

●一学期の中でないとみられない一こまだっ

た。

あそび道具のかたづけはとてもじょうずになった。細いブロックを私がざくつと箱に入れようとしたらあべこべにたしなめられてしまった。

●遊具のかたづけは最初から指導しなければならぬ生活指導の一つだ。やりなさいやりなさいと口で言うより、教師が率先してかたづけ幼児に手伝ってもらうところからはじめ教師が身を持って指導してゆかねばならぬ。そのうちはじめだけルートをつけてあげると幼児だけかたづけられるようになった。新しくブロックを積木のところへ加えた。これはかたづけたいへんなので箱をきめて入れればと思っていたところ、何と「先生だめだよ。こうしてゆるくはめていけばいいんだよ」とのことば。恥ずかしくなった。きつくはめればとれなくなるからゆるくはめてつなげる。床にべたりとすわってたのしんで、かたづけしている。

●二学期の終りころから今度は色別にしたりして、かたづける事において幼児はそこにも

うしろのしょうめんだあれ



食事の後かたづけをしながら窓からみると、私が遊んであげたとおり遊んでいた。

工夫と創造力を働かせて、もうここまできると、かたづけが幼児の生活の一部、あそびの一つに変化している。口には出さないが、私の心もうれしくなる。「なんてみんなかたづけがじょうずなのでしょう、真の心の感服が口をついてでた。幼児は得意そうであつたのだ。」

●先生木鬼しましょう。かけっこしましょう。と二人も三人もあつてもたりない位びっくりだこ。
まだ友だちがない人ぼつんとしている人の手を引っぱってかけっこをしたり、鬼ごっこしたり、あぶくたつたり、砂場遊びをしたり。

●みんなのたのしそうにあそぶ顔を見ると帰る時間がきてもあともう少しと少しは大丈夫と私の方が時間をのばしてしまふ。

●何か用事のためにたまたまに「林のくみお入り——」と呼び入れると、はーはー息を切らし顔を紅潮させながら「先生もうお帰り?」
林のくみーと呼ばれれば必ずお帰り最近では反射運動的になつているのも苦笑してしまふ。

●お盆を洗いながらふとみるとこの間遊んであげた遊びをそのまま友だち同志でやっている。

一人ぼつんとしていた人もメンバの一入。先生あそびましよう。先生入つてときた日。一緒に遊んであげたその事が実をむすんだよううれしかった。四才児は教師が誘導してゆく事で一歩一歩前進してゆく。ほつておいても年令が進めばできるが指導したのと放っているのとはその遊び、幼児の進歩が目みえぬ中に差を開いていく。こんな日が



来ると目にみえない努力もむくいられたよう
でうれしい。

運動会を機会にリレーの大会やり。

●運動会をひかえて、かけっこしたり、リレー
をしたりしてあそぶ。大きい組の人がリレー
をしたのが魅力らしい。

●その後は毎日毎日男の人全部が参加して

山を一まわりのリレーごっこ。静かにあそんで
いた人も参加していることはうれしかった。

●あまり毎日毎日やったためか朝おかさま
が、今日は脚がいたいと申します」と報告
があるのには苦笑した。

●今だにこのリレーは続いており、メンバ
ーをかえ、冬になると場所を廊下に移し、スキ
ップ競走などに変化して続いている。いつま
で続くだろう。

テレビのまね

●五、六人のグループが固定してきて、この
ところ二学期の中頃になると、グループもき
まり、遊びも、明日もこの続き」と、数種の
あそびが何週間かくりかえされる。そしてそ
のグループは次第に大きくなり、男は男、女
は女の大きいグループに変化し、次に男の人
と女の人が日によって、遊びによっては一緒
になって組ほとんどがこれに参加してあそん
でいる。

●このあそびの一つに、テレビの鉄腕アト
ム、鉄人二十八号のまねあそびがやはり出し

た。積木でも、ブロックでも、そしてまたお
画かきもそして自分もそれになって夢中。人
にわるいことをしたり危いことをしたりする

のはやめる約束をして一応このあそびはみ
がした。消極的な子が積極性を発揮してき
た。無口の子がにこにこしてとても朗かに明
るくなった。幼稚園がたのしくて、熱があっ

ても休みたくなってなどの楽しい悲鳴もこの
頃からはじまった。

●みんなが心身共に発達したようですべての
事がたのしくファイトを持って生活しだし
た。

●おもしろい事に、仕事をあそびの中に入れ
ても却って関心を持ちファイトを持って参加
してくるのには私もおどろきと喜びを持って
みまもった。

つくるという事にも関心や興味を持ち、空
箱を利用したり画用紙で作ったりして時折
の作品がたまってきたので、相談しておも
ちゃやごっこをすることにした。

●友だち同志のあそびができてくると、次第
に経験を広げ、画くことからつくる方へと興



味をむけてゆく計画を持つのが四才の二学期
終り頃からその一つの誘導としておもちゃ
やをよく主題にとるが、今の人達は二学期の
おわりには計画を持ち出しても興味を示さず
振りむく人が少なかったので充分に友だち同
志のあそびをさせてからと、三学期にのばし
た。或る一部の人は興味を示しても、全員が

少しの興味もなく参加しないと意味がないの
で、三学期の室内あそびを機会に計画を持ち
出してみた。

●これは成功で今までしごとには振りむきも
しなかった人が夢中で考えたり作ったり二人
で協同で作ったり。個人個人がそれぞれ自分
たちのアイデアを生かそうとし、また私の
方も生かしてあげようと思うのでその忙しい
こと忙しいこと。AさんにはAさんの考えた
事を相談のつたり助言したりして満足させ
てあげAさんにはAさんなりという事で朝
からやりかかってもおべんどうの時間にな
ってしまいう位時間がたりない。

●“こんなものはどう”“こうしたらどう”と
却って教えられるようなことも多々あり、む
しろ私の方が引っぱられる形だった。

●今までの経験では、教師が誘導をしよう
にしないと、長い期日をかける主題はなかな
かうまくゆかなかったが、こんどは私の方が
引きまわされ、期日もたりなく、子どもたち
のもり上りに満足を与えられなかったよう
で、今考えると私としても心残りの気がする。
●お店をつくって並べても“相談して”など
待たず、自発的に値段がつけられ準備はで

き、たのしく開店した。

レコードにあわせて自由に表現してあそぶ

●秋の運動会の時小学校の人が音楽行進をし
たのを見て早速、積木・丸棒積木が楽器で、
男女一しょに行進のまねとバトンガールのま
ねが始った。これもその当時、“先生レコー
ドかけて”といつてあそびの中によくくりか
えされた。

●しばらくこれも忘れられた時、ままごとあ
そびの発展で“お姉さんはバレエのおけいこ”
ということから、またレコードかけてと始
り、音楽にあわせて自由に表現してあそぶ。

●そのうちままごとあそびが忘れられ、平常
あまり活潑でない人、私の側にまだ時折くっ
ついていような人が、ふとみるといっしょ
うけんめいおどっている。そしてその表現
は、じょうず下手というより、いろいろの表
現を次々とする。

●一人、リーダーのようにみえる子どもは事
実バレエを習っているが、むしろ習っていな
い人たちがいろいろと表現を考え、たの
しそうにそして真げんにやっていた。



●「先生見に来て」と私や他の友だちもお客さまにして「そのうちおしばいもみせます」といっていても一つのごっこあそびになっている。

●これが次の経験にゆくよい機会で、これを

とらえて言語の方へ誘導してゆかなければならない。幼児の方が私の目標を知っているかのように次々と誘導の機会を提供してくれるようだ。

●しかし残念にも三学期は終わってしまった。

どうなることかと思案したことも折々あったが、こうして三学期になると、個々の幼児がたのしんで生活し、自分の力を個人なりに発揮していることは一つの満足だ。

或る時は困ったでしょう、この頃はよくなったと波のようにうねりをつくりながら発達していくのが四才児だろう。反省も勿論たくさんあるが、この基盤の上に足りないところをおぎないながら五才児の生活に移行してゆかなければならない。一人ひとりの活力にみちた笑顔が浮かぶ。

*

*

*

*

*

予 告

幼 児 教 育 講 習 会

日 時 昭和 39 年 7 月 22 (水)—25 (土) 日
 午 前 の 部 9.00—12.00
 午 後 の 部 1.00— 4.00
 会 場 お茶の水女子大学講堂
 主 催 お茶の水女子大学附属幼稚園内
 日 本 幼 稚 園 協 会

*

*

*